

1. 今年度の成果

(1) 遠隔研修を通して

4校合同研修会ではアグアスカリエンテス日本人学校（以下 AC 校）・サンホセ日本人学校（以下 SJ 校）の合同研究の取り組みを知ることができた。例えば「ロイロノートスクール」や「ループリック評価」を有効に活用し、遠隔教育をより円滑に行っている点がとても参考になった。

また、岸先生から遠隔教育に関する指導方法を何度も指導していただいた。先生から教えていただく中で、校内でも「google スライド」や「google ジャムボード」を活用して授業実践を行う教師が出てきた。

また、「グラフィックレコーディング」などの方法も教わり、指導方法の引き出しを広げることができた。サンパウロ日本人学校（以下 SP 校）、リオデジャネイロ日本人学校（以下 RJ 校）の研修の取り組みでは昨年度より、教師間の交流が活発になった。

これにより、同じ部会の教師間で何度も話し合って授業研究を行ったり、互いの授業を見合ったりする機会が増え、指導法を学ぶことができた。また研究授業の後には校内研修を行い、研究授業の成果や課題を話し合い、共有することで、研究をさらに進めることができた。

(2) 自校での授業や学校行事を通して

(1) の遠隔研修を通して学んだ指導技術は各学年の授業でも大いに役立った。例えばある授業では話し合いの中で子どもたちが「google ジャムボード」を活用し、KJ 法のように意見をあげていき、それを見ながら、話し合いをさらに進めていくというものもあった。また一年間通して子どもたちがオンラインでの学習を進めたことで、子どもたち自身が自分の画面を共有して小グループで話し合ったり、チャット機能を使って意見交換をしたりすることもできるようになった。また、日本で生活しながら在籍する児童とも学校行事等で一緒に顔

サンパウロ日本人学校 今年度を振り返り及び 2021 年度の研究計画

を合わせることができ、遠く離れた日本とつながりを持ちながら過ごすことができた。

(3) 外部講師による職業講話を通して

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、今年はいろいろな学校行事が中止される中、修学旅行も中止を余儀なくされた。（小 6 は場所を変更して実施）そこで、講師の方々のご厚意により、講話をいただいたことで子どもたちは実際に予定地には行けなかったが、お話の中からもたくさんのお話を学び、意義深い学習ができた。これも遠隔教育による実践の大きな成果と考えられる。

(4) 学校プロジェクトを通して

(2) でも少し触れたが、今年は昨年在籍していた児童の半数近くが日本に帰国し、学校、家庭、児童生徒にとっても辛い一年となった。しかし、その中で音楽科の教師を中心として遠隔教育を取り入れた 2 つの学校プロジェクトを行ったことで、離れていてもつながりをもつことができ、学校として心をつなぐによりそえることができた。

(5) SPRJ 合同遠隔授業を通して（課題も含む）

① 小学校低学年部会

<成果>

・自分の思いが相手に伝わるように工夫したり、発表を聞いた相手に感想や質問、よかったところを言えたりするなど相手意識が育っている面が見られた。



- ・2年生が1年生にたくさんアドバイスをするなど、異学年とも協働して学習を進めることができた。
- ・相手の学校のことや住んでいる地域についてより知ることができた。
- ・SP-RJ 両校の教師が計画から指導まで協働して行うことができた。

<課題>

- ・「身近な題材」を子どもたち自身が選択していくことが難しいため、題材設定をより考察していく必要がある。
- ・学習の定着を図るための振り返りの時間の手立てを考えていくことが必要である。

② 小学校高学年部会

<成果>

- ・生活環境、学年それぞれがちがう中で、回数を重ねるごとに話し合いがスムーズになり、協力して学習を進めることができた。
- ・お互いの調べたことや情報を共有し合うことで、相手の住んでいるまちのことについて理解を深めるとともに、自分の住んでいるまちのことについてもさらに理解をすることができた。
- ・google スライドを使って学習を進めたことで、操作にも慣れ、合同でできないときにも分担を分けて、資料

を作成するなど協力して発表の資料を作成することができた。児童の機器の操作スキルも向上した。

<課題>

- ・学年にばらつきがあったこともあり、話し合いを円滑に進めるにはもう少し人間関係づくりの時間が必要であった。
- ・交流学习だけでなく、普段の学習時からコミュニケーション力を磨いていくための指導をしていく必要性を感じた。
- ・機器の操作に慣れているグループとそうでないグループに差が出てしまった。普段の学習から少しずつ機器に慣れさせていくことも必要だと感じた。
- ・子どもたち同士で話し合いが進められるグループ、教師の手立てが多く必要なグループがあり、もう少し子どもたち同士で話し合いを進めていけるような手立てが必要だった。そのための手立てが少し難しかった。

③ 中学校部会

<成果>

- ・本学習以外にも国語科の討論の授業やビブリオバトル（本の紹介）など合同で学習したことにより、生徒同士の関係を少しずつ築くことができた。
- ・中間発表を何回か重ねることで、本番に向けてより内容を練り上げることができた。
- ・3人1組のグループで学習を進めたことで、意見を言いやすくなり、自分の考えを積極的に伝えたとともに、相手の意見も受け入れながら協働的に学習を進めることができた。<課題>
- ・学習の過程が進んでいくと、内容によっては考えが行き詰まり、話し合いに深まりがなくなる。そのような場面で学習課題の提示の仕方を工夫したり、教師が効果的に支援を必要としたりする場面がある。オンラインでの話し合いのテンポや問合いの難しさなど、そのような点も考慮しながら指導の工夫を考えていく必要がある。

2. まとめ（次年度に向けて）

2年目となった本研究だが、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大を受け、各海外日本人学校では登校が難しくなり、必然的にオンラインで学習することを余儀なくされた。しかし、昨年度から本研究が始まり、昨年度遠隔教育のさまざまなことを学んだことで、そのノウハウをいかし、職員一同力を合わせて、まずは4月から児童生徒の学習機会を保障しながら教育活動が行うことができた。今は年間で予定されている学習計画も無事に終わろうとしている。

実際には、初めは教師も児童生徒も家庭も戸惑いと苦労があった。しかし、昨年度学んだことが急遽指導を行う上での大きな柱となり、共にこの「遠隔教育」を柱として学習を進めていく中で、少しずつ慣れ、またできることも増えていった。遠隔教育を通して日本とブラジル、サンパウロとリオデジャネイロ、いろいろな地とつながりながら学習を進めてきたことで、ともに学び、またそれぞれの地の様子をリアルタイムで感じながら学習をしたこともとても良い学びになったのではないと思う。

何より、遠隔教育の中で一つ一つできることが増え、その可能性を感じるようになってくると今度は教師が「子どもたちのために何ができるのか？」を必死に考え、「子どもたちのためにできること」に挑戦を繰り返してきたことが今年度の一番の成果である。遠隔教育（オンライン授業）の中で、異学年交流や出前・主張授業、小学部祭などの学部行事を工夫して実施するなど、児童生徒相互の縦のつながりを深め合えたのも大きな成果の一つであったと認識している。挑戦によって得られた結果をしっかりと振り返り、そこで出てきた課題を次年度に向けて話し合い、研究をよりよいものにしていくことも不可欠である。

今年度の研究実践では遠隔教育の可能性をたくさん感じる事ができた。しかし、年度の後半に対面授業が認められ、学校に通えるようになると改めて遠隔でコミュニケ



ーション力をどのように育てていくかということの難しさも感じた。遠隔教育の中でどのように人間関係を構築し、コミュニケーション力を高めながら教育を進めていくかについては来年度以降も研究が必要であると考え

年度を追うごとに着々と研究の進み具合が見える中で、来年はまとめの年度となる。今年度よりもさらに自校内、RJ校をはじめとした4校、AG5事務局の方々とのつながりを密にしながら、より研究を進めていきたいと決意している。

2021年度（研究最終年度）の「遠隔教育」における本校の課題

遠隔教育の取り組みの中で、多様性を受け入れ、柔軟で豊かなコミュニケーション力をもち、協働できる子どもの育成をねらいとする『人間関係づくり』をどのように進め、そのためにどのような『遠隔教育プログラム』を開発・提案していくか。

報告：サンパウロ日本人学校
大谷 文人（R2年度 研究主任）